



いずみさの昔と今 第302回

「太鼓機の開発者・松浪米蔵」

前号に引き続き、現在開催中の冬季企画展「タオル誕生―和泉木綿の紡いだ軌跡―」に関連して、タオル誕生に至るまでの歴史についてお話しします。第二回目は、泉佐野における木綿業の発展に寄与した発明家・松浪米蔵に注目します。

江戸時代以来、木綿織物の一大産地であった泉州地域では、明治10年代（1877）に新たな織機が導入されたことをきっかけに、木綿織物の生産量が約二倍に増加しました。

この織機は、緯糸（よこ糸）を通すための杼（以下シャトル）を手動で動かしていた従来の織機とは違い、紐を引っ張ることでシャトルを横移動させる仕掛けが採用されており、作業効率が格段に向上しました。この織機に改良を加えて更に作業効率を向上させたのが、本市上瓦屋の大工・松浪米蔵です。米蔵の父藤原為蔵は、農事改良のための機械開発を行った腕利きの大工であり、父と共に水車開発に励んだ米蔵の兄藤原治郎吉も藤原式揚水車の発明

者として著名です。いわば発明一家である藤原家に生まれた米蔵は、のちに松浪家の養子となりました。

幼少期から発明一家の影響を多分にうけた米蔵が開発したのが、太鼓機です。太鼓機とは、従来の織機を改良し、経糸（たて糸）へ張りを与えるために砂利の入った太鼓型ドラムを取り付けた織機です。この仕掛けにより経糸（たて糸）の張り具合が均一となり、熟練していない織子でもたるみがなく、一定した品質の布を織ることができるようになりました。米蔵は明治25（1892）年から改良に着手し、明治32（1899）年には専売特許を取得しています。

当館で所蔵している太鼓機は、平成7（1995）年、市内でタオル業を営んだ加茂甚作氏により市内の民家の屋根裏から発見されたもので、国内で確認される唯一の太鼓機です。その本体には「専売特許第三八〇八号織機発明松浪米蔵」の焼印が押されていることから、当時流通した太鼓機そのものであることが証明されています。

太鼓機は、力織機の輸入や豊

田佐吉により開発された豊田式動力織機の普及により衰退しますが、開発当初には泉州地域で約5万台もの太鼓機が販売され、さらに兵庫県にまでその販路を広げました。太鼓機の開発は泉州地域における木綿織機・タオル織機の開発機運を高め、日本の木綿産業の発展に大きな影響を与えたといえます。



▶太鼓機（当館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日 月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
入館料 無料

日本遺産・中世日根荘を巡る⑬ ～旅引付編（3）「火走神社」～

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介いたします。
問合先 文化財保護課



◀政基公旅引付
※旅引付の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）



▲火走神社（大木）

大木にある「火走神社（ひばしりじんじゃ）」も、約500年前に九条政基が日根荘での生活を綴った日記「政基公旅引付」に記されている文化財の一つです。江戸時代には「滝宮」とも呼ばれ、入山田4か村（船淵・菖蒲・大木・土丸）の全体の鎮守でもあります。日根神社・慈眼院と同様、神社内には滝音寺という寺院もありました。

かつては犬鳴山七宝瀧寺とともに雨乞い儀式を行う日根荘内の重要な場所でした。文亀元（1501）年8月13日には滝宮に4か村の農民が集まり、紺と白の絹旗を立て、雨喜びの風流踊や相撲などを行った記録があります。

滝宮は、農民が芸能と祭礼を一体にした中世芸能の舞台でした。また、戦国時代の文亀元年7月15日には、村人が盂蘭盆の念仏風流や猿楽を演じています。猿楽は、翁舞「式三番」のほか古事記・日本書紀の神話をモチーフとした「鶉羽」が演じられるなど、京の都から離れたこの山間部でも当

時の流行文化が見られたことに、荘園領主の九条政基も驚いたことが旅引付に記されています。また、境内には「泉州日根郡入山田庄」の銘が彫られた正保5（1648）年の石灯籠が今も残されています。